

戦災孤児たちと郊外長谷川小学校

一九三〇年代の総力戦体制は、社会政策の充実をもたらしていた。昭和一三（一九三八）年、近衛内閣のもとで、内務省から分かれて厚生省（現厚生労働省）が成立し、福祉政策も移管された。大阪市では、昭和一四（一九三九）年六月、天王寺区国分町の長谷川源治郎（一八六七―一九四〇）から南河内郡国分町円明の土地および建物の寄贈を受け、疾病や栄養不良のことも健康増進を目的とした大阪市立郊外学園長谷川小学校が創設される（翌年、六甲・助松・淡路をあわせて四校体制となり、その一年で一七二九人が入園した。戦後は養護施設に転換）。三か月ごとに送り込まれた児童（初等科三・六年生が対象）の多くは、栄養価の計算された食事と適度な運動によって、身長・体重ともに向上がみられた「小山・田中一九九四」。校長の山根敦美（一八八九―一九七四）は、理科教育と体験学習を加味した先進的な実践を強みとしていた『赤塚二〇一九』。学校行事では、楠公劇が有名だった。こどもたちは、中世の英雄楠木正成のごとき「報国の戦士」となることが期待された（昭和戦前期、特に河内の児童福祉施設で楠公教育が隆盛した）。

しかし、大人の始めた戦争によって、こどもたちにはあまりに悲惨な事態が待ち受けていた。太平洋戦争の末期、米軍の本土空襲が本格化すると、都市部では栄養状態が最悪となり、身寄りを失った大量の戦災孤児・浮浪児が生まれた。大阪市内の罹災児童を受け入れたのが、長谷川小学校だった。終戦の日、玉音放送を聴いて泣き出した児童を慰めるために〈娯楽会〉を開催し、〈葡萄のジュースを作って吞ませ〉た（大阪市立長谷川小学校・学園編『生活のあゆみ第八集 創立三〇周年記念誌』（一九六九）という先生たちは、集団疎開先からの入校者が日に日に増え、いよいよ多忙を極めた。児童の一人は、〈皆が兄さんや父母につれられて家に帰って行くのに、僕には誰一人として迎えに来てくれる人がなかった。（中略）一人泣けて茫然と見送るばかりだった〉（大阪市立郊外羽曳野中学校編『羽曳野学校 戦災孤児の生活記録』（駈々堂、一九五二）と回想している。その後、国庫補助のほか、アメリカの宗教団体や日系人らが送ったララ物資で生をつないだ。三〇人前後だった入所児童は、外地引揚孤児を含め、昭和二二（一九四七）年一〇月には一五二人に増え『赤塚二〇二〇』、こどもたちの長い戦後が始まった。

35 長谷川源治郎 胸像



36 大阪市立郊外長谷川小学校 門標

37 ララ物資を受け取る学園生

（『長谷川郊外学園 学園生活写真帖』の1枚）



「コラム2」 長谷川小中学校資料の整理

本展示の開催に先立って、大阪市立長谷川小中学校から一括で資料を借用し、調査・整理をさせていただくことができた。その概要は、文書資料として、①スクラップ帳、②戦前・戦後にかけての写真帖、③小学校・中学校・学園(戦後、教育施設としての学校と保護施設としての学園が分離した。平成三二(二〇一九)年から、大阪市立長谷川羽曳野学園は社会福祉法人みおつくし福祉会に業務委託されている)の要覧、④同沿革史、⑤学内誌(『研究のあゆみ』など)、⑥作文集(卒業文集など)、⑦歴代校長・学園長の叙位叙勲にかんする書類、⑧建築・営繕関係の書類(昭和五八(一九八三)年、小学校・中学校・学園を柏原に集約するにあたり、校舎・寮舎・プールを新造した際の資料など)などがあり(総計二七七点)、別に、門標四点(No.66など)がある。羽曳野を引き払うときに持ち込まれたとおぼしき、昭和中・後期の羽曳野中学校関係の資料が多数を占めるが、①、②にはより古いものが確かめられた。書類類は、少量のはがきを除いて確認できなかった。

①のうち、下に図版を載せたスクラップ帳は、戦前・戦後の新聞記事を集めた貴重なものである。また④には、沿革史編纂のために作成されたとみられる厚みのある簿冊があり、特に、「長谷川・羽曳野問題」をめぐる一連の文書が注目される。羽曳野方は戦前に大阪市が近鉄(天鉄)から借用した敷地を校地としており、その返還が求められるようになっていた。長谷川方でも、栄養士の配当がないなど、環境の未整備が問題視されていた。一九八三年における長谷川小学校・学園と羽曳野中学校・学園の一体化は、この解決策として行なわれたものであった。

最後に、校名に冠されてまでいる長谷川源治郎については、まことに意外であるが、今回調査分のなかに関連文書がほぼなく、検討を深めることができなかった。しかし、長谷川小学校・学園の『創立三〇周年記念誌』(一九六九)に所収された初代学園長 木田志治よしはる氏の述懐には、長谷川が時々大阪からおやつを背負って持ってきて、こどもたちが歓待していたとあり、その人となりを知ることができる。



39 長谷川小学校第3期生 写真

(アルバムの一部、1942年)

[大阪市立長谷川小中学校 蔵]



38 スクラップ帳

[大阪市立長谷川小中学校 蔵]

長谷川学園に収容された戦災孤児にかんする新聞記事は数多く、世間の関心を反映しているが、繰り返される「薄幸の子」などの表現は、孤児に対するレッテル貼りを助長した一面もあろうか。

ほかに、戦時下の「健民運動」(厚生省が主導し、結核対策を謳いつつ、「筋骨薄弱者」の体力向上を進めた)を取材したものがみられるが、精神論が覆い、科学的な教育はなりをひそめている[高岡 2021]。



本校は、大阪市こども相談センター等から、隣接する大阪市長谷川羽曳野学園に入寮された児童生徒が通う小中学校です。児童生徒は、生まれながらの多様な特性を持ち、過去に様々な境遇に置かれたことが起因となる個々のリマインダーを抱えています。学園は、心理治療を中心とした心理士等の専門スタッフが調っており、投薬を含めたトラウマインフォームドケアが行われ、子どもによっては、一九歳程度まで学園生活が続きます。

小・中学校とも最大一五名程度で、学級設置・教職員配置も義務標準法で定められた通りで、小学校は複式学級になっています。また、児童生徒の多くは年度途中に転入してきます。学園にとって本校は「**学園外唯一の社会的な学びの場**」で、本校教職員はアプローチのスキルを磨いています。また、すべての保護者対応を学園が担います。

次に、本校のカリキュラムマネジメントの特徴です。令和八年度から二年間、小学校・中学校とも文部科学省の**教育課程柔軟化サキドリ研究校事業**の指定を受けました。本事業で実施するカリキュラムの特徴が二つあります。

一つは、主体的な学ぶ力により自ら規律を生みだせる**探究学習**です。探究学習の課題設定は幅広く、世の中や世界、将来的な課題等に視点を置き、課題設定を教員と一緒によく考えぬきます。GIGA端末をフルに活用し、プレゼン等で**情報活用能力が抜本的に向上**していきます。本校の**学校教育目標**の二つの力、「**生きて働く力と自ら学ぶ力の育成**」に繋がります。小学校では四五分授

業を四〇分に短縮し、午前中に五時間の授業を行い、中学校では五〇分を四五分に短縮して授業を行います。その短縮してできた「**余白**」の時間と総合的な学習の時間を併せて、探究学習のスパイラルの繰り返しにより、将来に生きて働く深い学びにつなげていきます。もう一つは、**教職員の午後の会議を、水・金曜日の六限の時間帯に設定**することです。教職員の裁量の時間を増やし、働き方改革をさらに進めます。子どもたちが持つ**特性を個性として認め**、一人ひとりが持つ潜在能力をひき出しながら、教職員との営みの繰り返しの中で、児童生徒が将来社会に出て**他者と協働**できるように「**自己調整力**」を育みます。

○長谷川小中学校

○長谷川羽曳野学園

○探究学習



【沿革】

昭和一四年 大阪市天王寺区国分町 長谷川源治郎氏が、大阪市小学校の児童の健康増進の目的で、自己の土地建物を市に寄贈され、大阪市立長谷川校外学園が創設される。

昭和三年 大阪市立郊外長谷川小学校が収容施設となり、寮舎は大阪市長谷川学園と改称される。

昭和五八年 現在の校舎が完成し、大阪市立長谷川小中学校が発足する。また、新寮舎が大阪市長谷川羽曳野学園と改称される。

(大阪市長谷川小・中学校校長 山口博功)